

環境・文化・国際・福祉・経済・教育など、社会全体がバランスのとれた持続可能な社会づくりを共通の目的として未来に向け価値を創造したい。

共創

2017年 8月 第10号

(一社) 四日市大学エネルギー環境教育研究会 四季報

ペルトン水車

活力ある人を育てよう

四日市大学名誉教授 工学博士 新田 義孝

はじめに

最近、元気な地方企業、中小企業が増えて来たと言う話のある学会の講演会で聞きました。海外に打ってでて、その企業ならではの製品を製造・販売してビジネスを発展させている事例が注目されるという話でした。ただ、その場合に英語を駆使して積極的にビジネスを展開している人が不足しているのが、ネックになっているのだそうです。大企業に元気の良い人材が集中して、中小企業に十分にはまわって来ないのが一因だと説明されていました。

また、最近耳にすることで心配なのは、若者たちが失敗を恐れるあまり、挑戦意欲を減退させているという話です。負けるのが怖いから、勝負しないのだそうです。しかし、卓球、水泳、レスリングなどのスポーツや将棋などの分野で新聞を賑わす二十歳より若い人たちの活躍を見ると、果敢に挑戦し必死に努力する若者たちを頼もしく思いますし、彼らの存在に嬉しくなります。そういった心配は外れているのではないかと思います。

四日市大学環境情報学部卒業生の自慢

筆者自身、四日市大学環境情報学部でゼミを

持った経験からすると、青年の心に火をともし機会さえ提供できれば、ロケットに点火したみたいに人生に挑戦する人が増えると思います。学部2年生の一年間をディベートで鍛え、英語論文の講読を毎週行えば、海外への目も開けました。仲間の何人かが積極的に生きようになると、必ずその波及効果が仲間たちに現れ、良いライバル関係が発生しました。新田ゼミからは海外の大学院で修士号を取ったのが二人、その内の一人はかのLondon School of Economicsで修士号を得て、パリにあるOECD本部で国際公務員となって活躍しています。もう一人は某電力会社の発電用燃料輸入を手がけていましたが、最近では出世して別の仕事を担当していると聞いています。もちろん、四年で卒業して必死に努力して三十代で中堅会社の重役になっている人もいます。複数の顧客企業と自社の間でウィン・ウインの関係をつくるビジネスモデルを考案して、試行し、成功のめどがたったら上司に報告するのだと、アンダー・ザ・テーブル起業のノウハウを熱く語ってくれた日のことを思い出します。その他、コンサルとして幅広く起業の手助けをしている人、地元のTV会社で気象予報の番組も担当している人、TV取材の現場で

汗をかいて充実した日々を送っている人等々、私の知る限りでは、「失敗を恐れる」などという言葉は、私のゼミ卒業生にはないと自負しています。

何故、四日市大学環境情報学部卒業生の自慢話をあえて書くのかというと、「努力すれば自分の将来が拓けていく」という人生への肯定感を持ってさえすれば、若者たちは自ずから頑張ることを言いたいからです。

若者の活力を削いできた自虐史観

「日本が太平洋戦争に負けたのは、軍が悪かったからだ、日本は近隣諸国に悪いことをしてきた」と教え込まれたら、祖国愛を持ってません。あのような大戦争をしたには、それなりの理由があったはずで、その理由を当時の世界状況から考え、どこで間違えたか、自分が為政者だったらどうしたらよかったのかを考えさせる歴史教育があったなら、自虐史観は持たずに済んだでしょう。

マッカーサーが戦後7年も「戦争についての罪悪感を日本人の心に植えつけるための宣伝計画」はWar Guilt Information Programと呼ばれ、NHKのラジオで「真相はこうだ」を放送しました。GHQの民間情報教育局の指令により、日本人が日本人を嫌いになる情報規制がなされ、アメリカが日本人を悪い考えから救い出したのだと宣伝したのです。また、昭和20年には神道指令を発して、「大東亜戦争」という言葉を強制的に「太平洋戦争」へと変えさせました。

筆者自身はアメリカに住んだこともあり、アメリカ人の良いところを沢山知っています。努力する人に対するアメリカ人のフェアなところは大好きです。だからWGIPの施行を持ってアメリカ嫌いになろうということを言う積りはありません。こういうアメリカの占領政策があったことを知り、また、最近国際的に明らかにな

ってきた史実を知って、コミンテルンが日米を戦わせようとして、まんまとそれに嵌まってしまったという側面を近代史で教えて欲しいと思います。そうすれば、歴史を勉強する際に、もし自分だったらどうしただろうか？当時、日米戦争を避けようとした人々がいたのに、なぜ成功しなかったのだろうか？などを考える人が増えるでしょう。

現在の一部の政治家や多くのマスコミが、'日本は悪い国だ'という自虐史観にとらわれて、与野党協力して'良い国'をどう創っていくかという議論をしないのだと思います。

自分の国、自分の育った地域、そして家族を肯定する若者を育てよう

幸せに育つということは、自分の育った境遇を肯定できることだと思います。だから、親は離婚してはならない。離婚しないような結婚相手を慎重に選び、結婚したら結婚生活が二人だけのものではないことをしっかり自覚して欲しいと思います。同じことが、地域についても言えます。四日市に生まれ育って、とても良かった。良い両親に恵まれ、学校の先生はチャンスを与えてくれ、近所の人たちにも優しくしてもらった。幼な友達は一生の宝だと思える'ふるさと'からは、活力のある若者たちが育ちます。

伊勢竹鶏物語は、この地域の高齢者たちが環境を守り、生き甲斐を創り、そうしたいくつものグループが協創して行く社会を目指しているプロジェクトです。若者たちが、シニアたちのそういう生き生きした姿を見てくれれば、この地域で一生を過ごすにはきっと素晴らしいことだとガッテンしてくれるでしょう。





「道中」の文化産業

四日市大学経済学部教授 富田 与

四日市に住むようになり20年余、日常生活の不便はあまり感じたことはない。ただこの間、博物館、美術館が少ないことには不自由さを感じ続けている。はじめの数年は、欲しい本を手に入れるのにも苦労した。その頃の地方都市は、どこも、本が手に入りやすかった。インターネットのおかげで、本屋をうろつく楽しみとは引き換えになってしまったが、本の入手はたやすくなった。確かに、インターネットを使えば遠くにある博物館・美術館の収蔵品を見ることもできるようにはなった。ただ、すでに購入を決めている書籍をインターネットで注文するのは違い、博物館や美術館に足を運ぶ経験はインターネットでは代用できない。書店で未知の本に出会うのと少し似ているかもしれない。

6月はじめ、所用で長野市松代にある実家に一泊二日で帰省した。そのついでに、信濃美術館と池田満寿夫美術館に寄った。信濃美術館は中学時代からたびたび訪ねた馴染みのある美術館のひとつだ。改築のため10月から長い休館に入る。最後の絵画展としてフランス風景画展をやっていた。池田満寿夫美術館は実家にいちばん近い美術館だ。没後20年の展覧会をやっていた。実家から信濃美術館までは約8キロ。この道のりには、多少の回り道はあるのだが、真田宝物館など3つの市立の博物館と池田満寿夫美術館を含む2つの私設美術館、そして県立の信濃美術館がある。

こんな数字がある。東京151、長野46、京都35、神奈川33、兵庫33、愛知33、岐阜15、三重7。何の数字だろうか。全国の展覧会情報を検索できるサイト「アートスケープ」でみた6月7日現在の都道府県別の展覧会

数だ。同じような検索サイト「インターネット・ミュージアム」で見た展覧会・イベントの同じ時期の数字は、東京165、長野13、京都13、神奈川46、兵庫26、愛知16、岐阜16、三重2となっている。それぞれのサイトに傾向の違いがあり、かなりばらつきはある。ただ、東京が圧倒的に多く、三重はかなり少ない事はどちらの数字からも言えそうだ。

では、展覧会の会場となる美術館や博物館の数についてはどうだろう。文部科学省「社会教育調査 平成27年度」から数字を拾ってみよう。美術館については、全国で623ある美術博物館だけを見ると、東京51、長野72、京都20、神奈川21、兵庫19、愛知17、岐阜21、三重3となっており、全体の1割以上が長野にあることになる。同様に博物館を見ると、全国では1240、東京94、長野83、京都33、神奈川54、兵庫44、愛知37、岐阜22、三重16で、こちらは東京が多い。どちらの数を見ても三重は少なく、展覧会・イベント情報が少ないのも頷ける。

博物館や美術館の分布には、それぞれの地域の歴史・風土など様々な事情が考えられる。四日市で感じてきた不自由さは、その意味では、たまたま博物館、美術館の多い長野で育った人間が、そうしたものが少ない三重に住むようになったのだから仕方がない話と言ってしまうまでもなかろう。確かに、ある時期まではそれでよかった。

しばらく前にこんなことがあった。何の偶然か、松代でスペインからの観光ツアーと立て続けに遭遇した。真田宝物館の駐車場、池田満寿夫美術館、隣接した場所ではあるけれど、それぞれ

別の日に、ガイドの方の手助けをした。仕事柄、スペイン語との付き合いは短くない。「トイレはどこか」というスペイン語が分からなかったようだ。

それにしても、なぜ、スペインなのか。確かに、善光寺には以前から外国人観光客はいる。最近では、湯田中の「スノーモンキー（雪景色のなかで露天風呂に入る野生の日本猿）」にも外国から観光客が集まっている。仮に、こうした周辺の観光地に向かう外国人客であったにしても、博物館、美術館が集まる松代は単なる通過点ではないということだろう。「見せるものがある」、「見るところがある」、「それもいくつかまとまってある」ということだ。

文部科学省の調査によると、歴史博物館、美術博物館への入場者は、2010年までの四半世紀では、ほぼ一貫して増え続けている。歴史博物館では、1986年には5,200万人ほどだった入場者が2010年には約7,900万人に、一方、美術博物館では、約3,000万人から6,170万に、ほぼ倍に増えている。この間、登録美術館の数が減少していることを考えると、美術館1館当たりの入場者数も増加していると考えていいだろう。

こう見てくると、ひとつの推測にすぎないのだが、長野はただ多くの観光地があるというだけではなく、ひょっとすると、観光地への「道中」でも文化産業が根付き始めているのかもしれない。これは長野ばかりではない。人口10万人当たりの美術館の数を見ると、これは使う数字により多少の違いはあるものの、山梨、長野は上位を占める。いずれの県も別荘や旅館が多く、別荘での滞在中に出かける先であったり、どこか別の観光地に向かう「道中」に立ち寄る先であったりするのが博物館や美術館だということだろう。

翻って、四日市はどうだろうか。旅館の数だけで見れば、三重も少なくはない。伊勢神宮、鳥羽、志摩、熊野古道など観光地も多い。

ところが、四日市は、そうした観光地への「道中」にありながらも、博物館や美術館はもとより、「見せるものがある」、「見るところがある」、「それもいくつかまとまってある」という状況では、残念ながら、ないようだ。

大学の地域貢献が喧しいなか、5年ほど前から観光振興やら地域振興やらに関わる場面が増えてきた。産業構造の変化に対応し、環境への影響が少なく、次世代への求心力を持つ何かを考えるとすれば、やはり文化や観光に目を向けざるを得ない。人口が減少しつつある日本の現状を考えると、地元や国内だけではなく、むしろ海外にアピールできることが、文化や観光の必要条件となる。

来年から外国客船が四日市港に寄港するようになるという。このままだと、四日市は単なる通過点になりかねない。

「道中」には道草の楽しみがある。博物館、美術館に限らず、ふらっと立ち寄ることができるような「見せるものがある」、「見るところがある」、「それもいくつかまとまってある」と言う状況を作っていくことを、そろそろ、考える時期に来ているような気がする。



四日市市立博物館・四日市公舎と環境未来館

1945年7月24日四日市で行われた 原爆投下訓練の悲劇

早川 寛司

広島・長崎への原爆投下の前（1945年7月20日から8月14日） 全国30の都市に49発のポンプキンという爆弾が投下された。長崎に投下された原子爆弾と同じ形・同じ重さ（約4.5トン）。原爆同様にB29が一機で一発だけ投下していく。全国で415人の死者が出ている。その中で、1945年7月24日に四日市に投下されたポンプキンの着弾地点が71年間、不明であった。犠牲となられた方のお名前も不明であった。それを2016年8月ついに突き止めることができた。



亡くなられたのは、茨木房子さん（当時29歳）と、その二男・恵巨（けいご）さん（8歳）であった。しかし、調査を始めてすぐにわかったわけではなかった。

調査開始から半年近くかかった。

1 「前ノ山」はどこか

3月12日、四郷小学校の先生の協力を得て、四郷郷土資料館保存会のみなさんのお話を伺うことができた。このとき「戦後、1つ爆弾が落ちた跡」で遊んだという体験をもつ伊藤哲夫さん（1946年生まれ）と出会うことができた。初めは「現在の笹川東小学校か笹川団地の辺りに大きな穴があった。それがポンプキン着弾地点だろう。」ということだった。

ところが、4月末、伊藤哲夫さんの同級生の福田稔さん（1946年生まれ）から「爆弾の犠牲者も見たという81歳の人」がうちの隣に住んでいるという情報が寄せられた。

その人は小坂壽保さん（1935年生まれ）であった。小坂さんによると爆弾が落ちた場所は、海軍官舎の前の「安政池」の東の堤防だというのである。

下の写真がその「安政池」である。現在は、住宅地として造成中で、池の水もほとんど抜かれている。



この安政池の近くに、戦争中の海軍官舎が修復されてはいるものの、現存するという情報も寄せられ、伊藤哲夫さんと一緒に訪ねてみた。そこで出会ったのが福堀利昭さん（1937年生まれ）である。福堀さんからは

「茨木さんという家の奥さんと10歳くらいの息子さんの二人が亡くなられた。」と教えていただいた。

ここまでの聴き取りの経緯が、2016年7月31日の読売新聞に「模擬原爆着弾地一つ判明」として掲載された。

2 ポンプキン投下の瞬間を見た

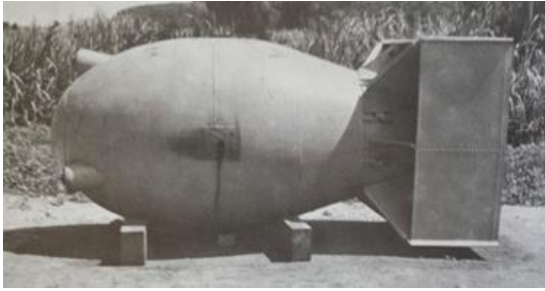
その後、亀山の知人・岩脇彰さんから

「『伊勢の海は燃えて』（1978年第三文明社）という戦争体験談集の中に、ポンプキン投下の瞬間に出会ったのではないかという人の文章があるよ。」という連絡をもらった。

1945年当時27歳、ご存命なら98歳になっている片山巳一さんという方の体験談だった。片山さんは「真黒な雨傘をさかさまにしたような爆弾」が落下してくるのを見た、道路に伏せると「ものすごい音とともに砂が頭に降ってきた」という生々しい体験談を書かれている。しかも、爆弾で亡くなられた方とは同郷で（美杉村）、その「婦人と子供」のお通夜にも出たという。この片山さんか、そのご家族を探すこ

とできたなら、さらに詳しくわかるのではないかと思った。

※下の写真が「パンプキン」



丸い弾頭の部分を下にして高速で落下してくる様子が「真黒な雨傘をさかさまにしたよう」だったのであろう。

探せば見つかるものである。なんと、片山巳一さんの配偶者・片山たずさん（1923年生まれ）にお会いすることができた。

3 片山たずさんのお話

片山たずさんに、夫の巳一さんが書かれた体験談について確認した。

「この亡くなられた方は茨木さんですか。」

「そうです。茨木さんです。きれいな奥さんでした。女優さんのような、背の高い方で・・・」と、たずさんは、ついこの間のことというように、次々と思い出されることを話してくださいました。「男の子は顔が上を向いて、おなかがねじれて脚が下を向いていました。それはかわいそうでしたよ。奥さんも子どもさんも顔はきれいなままでした。」

「旦那さんは『まさこ』確か『まさこ』と呼ばれたと思いますが、奥さんの顔に口を近づけて名前を泣きながら呼んでいました。それはもう気の毒でした。」

お話の途中から、片山たずさんは涙を浮かべて、お話をしてくださいました。

その後、茨木さんのお孫さんにあたる方の連絡先として教えていただいたところに電話をした。それが8月31日であった。電話をかけると、「新聞で読んで知っております。あの模擬原爆のことですね。私は当事者です。あのとき、現場におりました。」と答えられたので、私は驚いた。

電話にでられた方は茨木正勝さん（1936年生まれ）。亡くなられた房子さんの長男。亡くなられた男の子は正勝さんの弟で房子さんの二男（8歳）だったのだ。さらに、もう一人、三男（6歳）と1歳の長女もいたのである。破裂したパンプキンの無数の破片が茨木さん家族が住んでいた海軍官舎に襲いかかった。そのうち、破片の一つは、お母さん（茨木房子さん）の首を切り裂き、もう一つの破片は茨木恵巨（けいご）さんの腹部を貫通したのである。

後日、片山たずさんに伺った話では茨木さん母子5人は、7月23日に美杉村から四日市に来たばかりだったというのである。茨木さん母子が美杉村から津駅に向かうバスに乗ったとき、片山さんの妹さん母子もいっしょに、そのバスに乗った。しかし、「津も四日市も空襲にあうかもしれない。」と、片山さんのお母さんがバスに乗った妹さんたちを強引に降ろしたというのである。

茨木さん母子は、そのままバスに乗って、津駅へ、さらに四日市へと向かい、空襲に遭われた。7月24日は四日市へのパンプキン投下だけでなく三重県全体が空襲を受け、特に津では1,200人の死者を出す大空襲を受けていた。

もし、その日、そのバスに乗らなかったら、バスから降りていたら、7月24日の朝、家族みんなが家の外の畑に行っていたら・・・

茨木さん家族の悲劇は、戦争というのは、理不尽で酷いものであることを物語っている。原子爆弾の投下は、アメリカにとって「実験」という側面があったということはよく指摘される。その「実験」を確実に成功させるために「パンプキン」という原爆投下に向けての用意周到な「訓練」まで実施していた。そして、その「訓練」で多くの人が犠牲になっている。

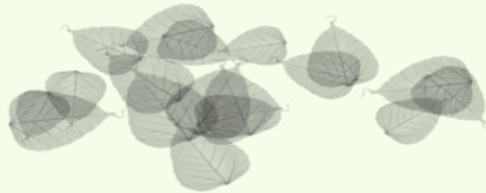
二度と、このような戦争の惨禍が繰り返されることのないことを願い「記憶」を「記録」し、子どもたちに語り継いでいきたい。

竹を‘廃棄物にしない’ことは可能か？

伐採した竹は廃棄物であるため、粉碎して自分の畑に撒いたり、第三者が使用することは廃棄物の処理にあたる可能性があります。

このため一般社団法人四日市大学エネルギー環境教育研究会及び三重県四日市農林事務所四日市鈴鹿地域農業改良普及センターでは、里山保全活動で伐採した竹を粉碎して粉にしたものを、土壌改良や農産物の品質を高めるための有効な農業資材として有効活用できないか検証するために実証試験を行うことを計画し、「竹林整備で発生する竹の資源としての有用性の実証試験研究」という書類にまとめ四日市市に提出しました。（伊勢竹鶏物語Part 2）

ここからは私の期待ですが、Part 2を実施して、竹が有効活用できるものであることを実証すれば、‘廃棄物にしない’施策へと進展できる可能性が見えてきます。もっと積極的に、地方自治体が‘竹の有効活用’を環境保全と地域活性の施策のひとつとして採用する可能性が拓けるかもしれません。そこを目指してユニークな四日市、独創的な四日市を目指して、皆で‘竹を廃棄物にしない’ように展開して行こうではありませんか。



季節のとびら

射ても皆玉の汗かき大鳥居
老いかくすけんか祭りの法被なり

不忙
不忙

今年ユネスコの無形文化遺産の登録をうけた、三重県四日市市富田地区の「鯨船行事」は、「鳥出神社」で行う、陸上での模擬捕鯨行事である。

富田一色の「けんか祭り」は、「飛鳥神社」（祭神はえびす様）で行う鐘と太鼓の練りによる勇猛果敢なお祭りで、いずれもお盆の行事である。

富田は遠洋漁業、富田一色は近海漁業の漁師町として、江戸時代より伊勢湾の中でも尾鷲、鳥羽、松坂の港とともに栄えた港であった。

周辺の天ヶ須賀、富田浜、霞ヶ浦、午起地区は白砂青松の海岸線で、中京地区屈指の海水浴場であった。富田浜地区は昭和初期には、「蜃気楼」で有名な場所でもあった。

今は工業地帯となりその面影はなく、天ヶ須賀の隣りの高松海岸にほんの少し貴重な干潟を残している。

今年も7月の「海の日」には、KEIP'S（霞ヶ浦地域環境行動推進協議会）企画の高松海岸での清掃作業に参加した。

100名近い人が、四号幹線の工事完成を間近に見ながら沢山のゴミを拾った。

多くの方は半世紀前のこの付近の様子を知らないが、当時の様子を知る者には開発により自然が失われていくことは胸が痛む光景である。

ここで鯨や沢山の魚が獲れた昔のことを神事や祭事で伝承していくことは大切であるが、今の時代を生きるものは、当時の豊かな環境を語り継いでいくだけでなく、少しでも復元することも環境保全の立場から大切である。

産・官・学・民の協働作業により、里山・里地（河川）・里海に暮らす人々が、環境省「自然再生推進法」等の活用により、高松海岸の半世紀前の様子の一部をたとえ半世紀の時間をかけてでも実現することこそ、持続可能な開発であると考えている。

来年の「海の日」までには多くの仲間の賛同が得られることを期待する。

自然再生推進法（平成14年公布）

自然再生は、健全で恵み豊かな自然が将来の世代にわたって維持されるとともに、生物の多様性の確保を通じて自然と共生する社会の実現を図り、合わせて地球環境の保全に寄与する（第3条抜粋）
(て)

【表紙の写真】 千草水力発電所（中部電力）



太陽光発電等の新エネルギーが予定計画を超える勢いの昨今、110年前に稼働した水力発電所が、今日なお電力を供給し続けている頼もしい姿を紹介したい。

明治40年に三重県北西部の朝明川上流部で、表紙写真のペルトン水車2台による350kwの発電を開始した。

全国的に産業が活発化し、各地に電燈会社ができ、供給電力は飛躍的に伸びていった。当時の電力供給規模が、需要家戸数・灯数で示されているのも素晴らしい。



一時代の電力を築いてきた発電チームのメンバーとして、今なお役割を果たしている姿は、「新エネ応援団」には持ち合わせていない地域への貢献と責任感が伝わってくる。エネルギーの需要と供給はこうありたいと、便利すぎる電気時代に切に思う。



(と)

協賛金御礼

四季報発行3年目となり、当研究会の活動に下記の団体をご協賛いただき厚く感謝申し上げます。



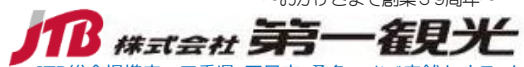
四日市大学

三重県四日市市萱生町1200番地
<http://www.yokkaichi-u.ac.jp>



中部電力株式会社

～おかげさまで創業39周年～



JTB総合提携店；三重県・四日市・桑名・いなべ店舗ネットワーク
地域や人を、もっと元気に D I K地域プロジェクト

三重県四日市市中川原1丁目1番29号
<http://www.daiichi-kanko.co.jp>



ささき観光バス

三重県三重郡菟野町菟野9711-1
<http://www.ssk-kanko.co.jp>



株式会社コーストメイト

三重県四日市市羽津4502
<http://www.tsgroup-co.com>

ご寄付をお願いします

当研究会では、環境教育、地域循環型社会づくり、四季報“共創”の3つを柱とした社会貢献事業を行っています。

経済のとりまく状況が厳しい中で、誠に恐縮ではございますが、是非ともご寄付をいただきまして会の運営に使わせていただけましたら幸いです。

振替用紙を送付させていただきますので、FAXやメールでご連絡ください。

どうぞ、よろしく願い申し上げます。

四季報：共創 2017. 8発行 第10号

発行：一般社団法人 四日市大学エネルギー環境教育研究会
会長： 新田 義孝



〒512-8512 四日市市萱生町1200番地 四日市大学内
電話：059-363-1414 Fax 059-363-1414 メール：info@yokkaichi.ene.com
ホームページ：yokkaichi-ene.com

編集長(副会長兼事務局長)：矢口芳枝 担当：近藤実千代 写真：戸田和男 コラム：寺本佐利